

戦争観の複数性からみる平和創造への可能性と不可能性

研究代表者：橋爪 里依

共同研究者：権代 絢音 平賀 宏尚 三宅 果穂 宮脇 阿子

はじめに

第1章 博物館展示からみる国家間の戦争観の相違

第2章 国家にとっての戦争、住民にとっての戦争

第3章 住民と住民との間の戦争観の多様性

おわりに

はじめに（権代絢音）

本稿は、橋爪・権代・平賀・三宅・宮脇の5人で行なった共同研究の成果をまとめた報告書の要約である。本研究の目的は、戦争観の複数性を明らかにすることである。戦争という歴史事実は、国家間や国と住民との間、一つの国の中の地域間、体験者と非体験者との間など、様々なレベルで異なる戦争観を生み出している。複数の戦争観はときには対立して論争を生むこともある。私たちの関心は、平和創造に向けた第一歩として、戦争観の複数性が形成される条件と諸要因を明らかにすることである。

第1章 博物館展示からみる国家間の戦争観の相違（三宅果穂、宮脇阿子）

1節 戦争の歴史と博物館（三宅果穂）

（1）第二次世界大戦の歴史

本文では戦争に関する展示を中心とした博物館を戦争博物館、平和博物館とする。まず歴史を整理し博物館について考察する。取り扱う時代の範囲を1931年から1945年とする。

日中戦争の始まり：1931年9月18日、日本陸軍の関東軍は満州鉄道を爆破し、この爆発を中国側の仕業とした。関東軍は政府や天皇の反対を押し切り満蒙地域に兵を進め、満州の大半を占領、満州国を建国した。これらを満州事変という。そこで国際連盟はリットン調査団を派遣し満州の調査をした。結果、日本に満州国からの撤退を要求したが日本はこれを拒否し、国際連盟を脱退する。そして1937年7月7日、中国北京郊外の盧溝橋付近で夜間演習中の日本軍は銃撃を受け、応戦する。この衝突をきっかけに日中戦争が始まっていく。

太平洋戦争：この頃日本は、石油や鉱石資源のほとんどをアメリカからの輸入に依存していたが、インドシナに石油や錫、ゴムなどの資源を求めて日本軍が進駐し、これに対してアメリカが「石油の対日輸出全面禁止」を通告する。日米交渉を続けるが決裂したため日本は武力発動を決意し、1941年12月8日真珠湾攻撃に至る。日本は破竹の勢いで進軍し、東南アジアのほぼ全ての地域をその支配下に収めていくも、「ミッドウェー海戦」「ガダルカナル攻防戦」の大敗から日本の戦争は泥沼化し、東南アジア諸国は次々と攻め入られ、最後の砦と言われた硫黄島が陥落し、沖縄で地上戦に持ち込まれるほど日本は追い込まれた。やがて広島と長崎に原爆が投下され、ようやくポツダム宣言の受諾が決まり、1945年8月15日終

戦を迎えた。

(2) 博物館から見る戦争観

15年戦争に関わる戦争博物館を日本、中国、アメリカの三国からとりあげ、各国の戦争博物館の展示特徴からみる戦争の捉え方をまとめる。

初めに日本から「ひめゆり平和祈念資料館」。館内には沖縄が琉球王国から日本の沖縄に至るまでの変化が流れに沿ってわかるように資料が置かれ、沖縄戦での敵の進路などの説明、当時の遺留品が展示されていた。病院壕のジオラマや、戦死しためゆり学徒の遺影、生存者の証言集の展示が戦争の悲惨さを伝え、命の尊さを主張している。

中国の「侵華日軍南京大虐殺遭難同胞纪念馆」はリアルな人形での日本兵の虐殺現場の再現や文章での説明や、当時の新聞記事や写真などが南京大虐殺の残酷さ、悲惨さを伝えていた。その後日本がポツダム宣言を受け入れ無条件降伏した後、中国が主権を取り戻していくプロセスが描かれている。(古市 2013) 日本による侵略に打ち勝ったというような中国の力強さを主張するようである。

最後にアメリカの博物館「アリゾナ・メモリアル」は真珠湾に建設された白を基調とした外観でそこからは海底に横たわる戦艦アリゾナの姿が望める。館内の展示物はグロテスクなものはあまりなく過剰な戦争の悲惨さを説いたものも日本に対する感情的なバッシングもなく、あくまでアメリカ目線ではあるが、すぐれて「中立的」なものであった。戦争を未だに続けている国であるからこそ、戦争を否定するようなメッセージでなく戦争を勝利へ導いてくれた戦没者を英霊とし、そんな彼らのことを忘れはしない、というような博物館である。

2 節 国によって異なる戦争観 (三宅果穂)

戦勝国と敗戦国について以上の博物館からみる戦争観から比較する

(1) 日本と中国

日本の戦争博物館において日中戦争は歴史事実を記録した展示が多く、日本の通史を展示している千葉の国立歴史民俗博物館でも中国での侵略に関する資料や展示が少ないことから、現在の中国との歴史認識の摩擦問題によって明確な表記や展示が困難であることが分かる。それに対し、中国の歴史博物館は日中戦争に関わる遺跡や博物館が多く存在する。第一節で取り上げた博物館のように、当時の被害状況をアピールするような展示で日本軍の残虐さを表すと同時に、侵略を乗り越え復興していくプロセスを展示しており、日本に勝利したことを示唆している。中華民族の誇りを持たせる愛国主義教育の場としても機能している。

(2) 日本とアメリカ

日本での戦争博物館の展示は太平洋戦争が中心で、沖縄の地上戦や原爆被害の体験をもとに戦争の残酷さを表現し、「戦争をしてはいけない」ということを来訪者に感じさせる。そもそも憲法第9条によって戦争を放棄しているため、戦争を否定する内容になるのは自然である。

一方アメリカは現在でも戦争を行っており、日本との戦争では本土が襲撃されることもなく、逆に戦争で国の経済が回り豊かになった。アメリカに戦争博物館が少ないのは本土が関わっていない事とポジティブな面もあり、こうした理由があるからだと考える。

3節 日中で対立する歴史認識（宮脇阿子）

1章3節では、日本と中国を例に挙げ、お互いの国が歩んだ歴史や現在抱える問題から、なぜ歴史認識の相違が生まれるのかを考察する。

（1）列強の日本、占領された中国

日清戦争や、第1次世界大戦などで相次いで勝利を収めた日本は、下関条約や、21か条の要求などで多額の賠償金の支払いや土地の譲渡、権益の譲渡などを当時の清朝に求めた。1937年の盧溝橋事件が発端となり日中戦争が始まると、日本は上海、南京を相次いで占領し、優位に戦いを進めていった。

（2）第2次世界大戦での立場の逆転

中国に対し、アメリカやロシアが支援を行い、それに伴って日本が劣勢に立たされる。さらに、日本が真珠湾攻撃を行ったことで、連合国側が本格的に参戦し、日中戦争は第2次世界大戦に発展した。アメリカの攻撃によって甚大な被害を受けた日本は戦闘力を失い、占領地域のほとんどを中国に奪還される。1945年、日本はポツダム宣言を受諾し、敗戦国となった。

（3）戦争を契機とした領土問題

日本、中国両国は、東シナ海に浮かぶ島々である尖閣諸島の領有を巡って争っている。中国は日本が戦時中に強引に中国から奪った土地であり、中国に返還されるべき土地だと主張している。一方、日本は、尖閣諸島は日本古来の領土であることは明白で、そもそも領土問題は存在しないとしている。日本は1895年に他の国が領有を主張していないことを確認したうえで尖閣を日本の領土に編入している。中国は、1968年の国連アジア極東経済委員会の調査によって尖閣諸島に海底資源が埋蔵されている可能性が指摘され、1970年、突如として領有権を主張し始めた。

（4）歴史認識対立の要因

戦争は、自国の権益や領土の拡大のために利用されるものであるといえる。戦争から最大限の利益を得ようとする政治的思惑が、過去の事実をも捻じ曲げてしまう。客観的かつ決定的な証拠が示されない限り、どちらかの領有権が認められることはない。双方が納得して領土問題を解決することが必要だが、今の情勢から考えると、非常に厳しいといえる。

第2章 国家にとっての戦争、住民にとっての戦争（平賀宏尚）

1節 沖縄基地問題（平賀宏尚）

この節において、国、沖縄住民という異なる立場によって、米軍基地がどのような存在であるかを明らかにし、戦争観の相違に迫る。

（1）国にとっての基地

国にとって、沖縄の米軍基地は、自国を守るため、そして他国との戦争においての中継地点として存在した。1945年春から夏にかけての激しい地上戦の結果、沖縄を占領した米軍は、ただちに軍事基地の建設を始めた。1951年には、サンフランシスコ平和条約と同時に旧日米

安保条約が調印され、翌年4月に発効された。旧安保条約によって、アメリカは日本全土に米軍を配備できる権利を認められた。つまり、国は、安全保障には、基地が不可欠であると考えていたということだ。

米軍基地があることで、アメリカが日本の後ろ盾となる。それは心強いことである。

(2) 沖縄住民にとっての基地

米軍基地があることで、住民は多くの被害を受けている。1995年には、米兵による、少女に対する強姦事件が起きている。この事件に抗議する県民大会に8万5千人が集まり、米軍基地撤去（整理・縮小）を訴えた。2004年には、米軍普天間飛行場のすぐ横にある沖縄国際大学に海兵隊の大型輸送ヘリが墜落したという事件があった。また、米軍基地建設は、自然にも悪影響を与えている。辺野古沖に、基地を移設することで、湾内に生息するサンゴを始めとする生き物の多様性を破壊してしまう。この基地移設に反対していた市民団体は、座り込みを行い、基地建設の工事を止めさせた。一方で、米軍基地があることで働く場が与えられ、生活をしている人もいる。

米軍基地があることで、そこに住む人々は被害を受けているだけでなく、沖縄住民の雇用口となり、生活を支えているケースもある。

(3) まとめ

沖縄に基地があることで、国の平和は維持されるが、その代償として、住民は多くの被害を受けている。また、国の平和維持に果たして基地が必要なのか。国と住民が分かり合うためには、自分たちの利益のみを最優先に考えては解決できない問題だ。

2 節 国立と民間の博物館（平賀宏尚）

(1) 国立と民間の博物館、それぞれの定義

国立と民間の博物館とでは、定義が違う。そこから、国家にとっての戦争、住民にとっての戦争を考えていく。

国立の博物館の多くは、戦争博物館であり、展示及び諸活動の本質において戦争を肯定する思想に基づいている。民間の博物館の多くは平和博物館であり、展示及び諸活動の本質において、戦争を否定する思想に基づいている。国立の平和博物館は、しょうけい館（戦傷病者資料館）と平和祈念展示資料館の2つしかない。南（2009）は、戦争博物館と平和博物館の分類を、哀悼か顕彰かという視点、軍事技術の無批判な賛美という視点、人間の破壊という視点といった3つの視点を軸にして行った。

(2) 昭和館（国立）と立命館大学平和ミュージアム（民間）の比較

実際に博物館を比較することで、国家と住民の戦争観に迫る。

昭和館は一貫して、戦中・戦後の苦労に関するものを展示しており、歴史には一切触れていない。昭和館のホームページは、しょうけい館、平和祈念展示資料館のホームページにリンクしている。国は、博物館の中で、戦中・戦後の苦労を示すことを念頭に置いている。

平和ミュージアムは歴史を淡々と語り、見る者を深く考えさせる。だからこそ、明確な答えを提示していない。文章や写真や映像で、私たちの戦争の実態を教えてくれる。それ以上

のことは私たち自身で考えなくてはいけない。

(3) まとめ

国は、過去の戦争における認識をはっきりと下せていないのではないだろうか。国立の博物館故に、展示内容は日本の正史と受け入れざるをえない。それに対して、民間の博物館は過去の戦争において、完全に否定的立場に立っている。そこに、国家にとっての戦争と住民にとっての戦争は違って来る。

第3章 住民と住民との間の戦争観の多様性（橋爪里依、権代絢音）

1 節 民間博物館にみる戦争展示のバリエーション（権代絢音）

本節では、地域間の戦争観の多様性を明らかにする。第二次世界大戦時、沖縄の地上戦や、広島や長崎の原爆が原爆投下、東京の大空襲など、戦争体験は地域によって異なる。そのため、各地域がもっている戦争に対する考え方や、戦争の伝え方も異なっているのではないかと私は考えた。そこで、沖縄県の「ひめゆり平和祈念資料館」と京都府の「立命館大学国際平和ミュージアム」、長崎県の「岡まさはる記念長崎平和資料館」、東京都の「東京大空襲・戦災資料センター」の設立理念と展示内容を比較して、相違点と共通点を明らかにし、地域間の戦争観の多様性をみる。

4つの博物館を比較すると、それぞれ違った戦争観と平和に対する考えをもっていることがわかる。戦争については、ひめゆり平和祈念資料館と東京大空襲・戦災資料センターは、被害をもたらしたものであるとしていて、岡まさはる記念長崎平和資料館は、加害の歴史としている。立命館大学国際平和ミュージアムは、日本に被害をもたらしたものでもあり、日本の加害の歴史でもあるとした。つまり、被害を強調した展示、加害を強調した展示、その両者を強調した展示が展開されている。

平和については、どうだろうか。ひめゆり平和祈念資料館と東京大空襲・戦災資料センターは、被害を風化させることなく伝え、後世に命の大切さを感じてもらうことが、平和につながるという。岡まさはる記念長崎平和資料館は、日本が加害したという事実と向き合い、加害者責任を果たすことが平和への第一歩であると説いている。立命館大学国際平和ミュージアムは、平和とは、ただ単に戦争をなくすだけではなく、あらゆる暴力をなくすことであるという。戦争観と同様に、被害重視と加害重視の博物館があることが確認でき、さらに、それを戦争だけに留まらず、あらゆる暴力現象に注意を向けている博物館があることがわかる。

すべての博物館に共通して言えることは、戦争・暴力の記憶を風化させることなく未来に伝えることで、戦争・暴力のない世の中をつくりたいという意思があることである。

2 節 戦争体験者と非戦争体験者とのすれ違い（橋爪里依）

戦争観の多様性は、体験者と非体験者の間にもみられる。実際に戦争を体験した人と体験したことがない人の戦争観の違いが、両者のすれ違いを生む場合がある。体験者と非体験者がすれ違ってしまった事例として青山学院大学高等部の入試をめぐる出来事を取り上げる。

青山学院大学高等部は、2005年2月に実施した入試問題の英語科目で、元ひめゆり学徒の証言を「退屈」とする英文を記述、出題した。この入試問題は、筆者が高校時代の修学旅

行での体験を回顧しているという設定で、戦時中使用した壕を見学した後、ひめゆり平和祈念資料館で元ひめゆり学徒である語り部の証言を聞く、という流れだった。これについて英文で「正直に言うと彼女の話は退屈で、わたしは飽きた。彼女が話せば話すほど、洞窟で受けた強い印象が薄れた」と記述した。そして、なぜ語り部の話が気に入らなかったのかを設問にし、「彼女の話し方が好きではなかったから」を選ばせるようになっていた（琉球新報 2005. 6. 14）。

この入試問題では、実際に壕を訪れるなど体験したことに比べ、言葉という形で伝えることの難しさを考えさせるのが狙いであった。しかし、結果的に元ひめゆり学徒を傷つけ、同校の平和学習に対して疑念を抱かせることとなった。

戦争に対する考え方やその比重に違いがあることで、体験者と非体験者がすれ違い、問題が起きてしまうことは実際にある。たとえ悪意がなかったとしても、両者のすれ違いによって、体験者を傷つけてしまったり平和創造のための戦争体験の継承を困難にしたりする。

おわりに（宮脇阿子）

本報告書は、戦争観の複数性を明らかにし、平和創造の可能性と不可能性を明らかにすることを目的として作成した。

第1章では、政治的思惑が、第2章の国と民間では、国全体の安全を考えるのか、地域というごく小さい範囲で安全を考えるのかによって考えに隔たりが生まれることが明らかとなった。また第3章では、戦争経験の有無によって戦争に対する考え方に相違が生まれることが明らかとなった。

全てのレベルで共通して言えることは、戦争観を一致させることは極めて困難であるということだ。見えてきたのは平和創造の不可能性ばかりである。

しかし、平和を創造していくためには、今の世界がなぜ平和でないのかを明らかにする必要がある。つまり、平和創造の障害となっているものが明白とならなければ、平和創造どころか、平和創造への道も切り開けない。不可能性の徹底的な追求こそが平和創造への大きな一歩となる。

参考文献・サイト

保坂正康

2005『あの戦争は何だったのか 大人のための歴史教科書』新潮社

古市憲寿

2013『誰も戦争を教えてくれなかった』講談社

松竹伸幸

2013『日本の領土を考える』かもがわ出版

保坂正康 東郷和彦

2014『日本の領土問題』角川書店

孫崎享 山田吉彦 鈴木宗男ほか 読者たちの提言

2012『領土問題、私はこう考える』集英社

太平洋戦争研究会

2010『日中全面戦争』新人物往来社

前田哲男 林博史 我部政明

2013『沖縄基地問題を知る辞典』吉川弘文社

南守夫

2009「日本における戦争博物館の復活」季刊戦争責任研究 2009 秋季号

歴史教育者協議会編

2004『増補 平和博物館・戦争資料館ガイドブック』青木書店

[記憶と表現] 研究会

2005『訪ねてみよう 戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』岩波ジュニア新書

安藤裕子

2009「ヒロシマ・ナガサキはどのように表象されてきたか：公的記憶の変遷を辿る」
『早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士学位論文』

福田宏樹

「戦史とどう向き合う 戦争博物館」(朝日新聞) 2007. 12. 30, 31 付

<http://www.asahi.com/international/history/chapter07/memory/01.html>

[公式] ひめゆり平和祈念資料館 <http://www.himeyuri.or.jp/JP/info.html>

立命館大学国際平和ミュージアム <http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/>

岡まさはる記念長崎平和資料館 <http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen/>

東京大空襲・戦災資料センター <http://www.tokyo-sensai.net/>

「ひめゆり入試問題・反省機に平和学習実践を」(琉球新報) 2005. 6. 14 付

<http://ryukyushimpo.jp/editorial/preentry-3134.html>